

現象的意識の準一階説の提案

佐藤 亮司 (Ryoji SATO)

東京大学総合文化研究科

我々の意識的な経験には、感覚質やクオリアと呼ばれる独特な性質が満ち溢れている。このような感覚質を備えた意識経験は現象的に意識的な経験と呼ばれている。現象的意識を物理主義的に説明することは、心についての哲学的問題の中でもとりわけ難しい問題の一つであるとされており、ハード・プロブレムと呼ばれている。

現象的意識の物理主義的な説明という問題の解決として、有望であると考えられているのが表象説である。表象説では経験の持つ志向性に注目し、意識的な経験を表象として捉えようとする。表象においてはその持つ内在的性質と志向的性質を区別することができる。ここで内在的性質とは、表象がそれ自身で持つ性質であり、志向的性質はその表象が表すものの性質である。表象説は、感覚質を表象の志向的性質と考えることで、感覚質についての問題を解決しようとする。

しかし、表象説の主張だけではある経験が感覚質を備えた意識的な経験であるかどうかを正確に特徴付けることはできない。なぜなら、ある経験が志向性を持つ経験であったとしても、その経験が意識的でないということがあるように思われるからである。例えば、イタリア料理店で会話を楽しみながら食事をしているとしよう。このとき、話に没頭してしまうと、きちんと食事が進んでいるにも関わらず、パスタの知覚経験は感覚質を備えていないということがあるように思われる。しかしこのとき、パスタの皿を知覚して、フォークをきちんと用いることができていたのだから、パスタの知覚経験は志向性を備えていたように思われるのである。このように、ある経験が感覚質を伴った意識的な経験かどうかということを決めるには、単にその経験が志向的かどうかということを検討するだけでは不十分である。ある経験が現象的に意識的な経験であるためには、どのような条件がさらに必要とされるのかがこの発表のテーマである。

本発表ではまず、この問題における意識の高階説(P・カラザース、信原幸弘ら)一階説(F・ドレッツキ、M・タイら)の主張を論じる。意識の高階説の論者も一階説の論者も、現象的に意識的な状態とは、その状態から信念が形成可能であるような状態であると論じることによって、この問題に答えようとする。しかし、意識の高階説の論者は、高階の信念の形成可能性のある状態が現象的に意識的であるための必要条件とし、一方で意識の一階説の論者は、一階の信念を形成できることをそのための必要条件としており、この点において両者の立場は異なっている。ところが、信念についてのドナルド・デイヴィドソンの見解に従えば、一階の信念を持ちうるものは、必ず高階の信念も持ちうることになる。デイヴィドソンの主張が正しいとすると、意識の一階説の主張は、結局高階説の主張と区別で

きない立場であることになってしまう。

ところで、現象的意識の一階説、高階説の主張においては、現象的意識は信念システムによってアクセス可能な状態として考えられていたのであった。このような見方における意識的な状態とは、その状態から信念を形成し、実践的推論を通じて、より目的指向的な柔軟な行為が行うことが可能であるような状態であるといえよう。一方で、無意識的な状態とは、推論を介さずそれゆえに固定的な仕方で行われる行動を引き起こす状態であるといえる。そうすると結局、現象的に意識的な状態と無意識的な状態の区別は、その状態から引き起こされる行為の柔軟性によって行うことができるということになる。

しかし、生物の行う行動は、実践的推論を通じて行われるような行動と、推論を介さずに固定的に行われるものだけしかないわけではないように思われる。その二つの間に、信念を形成して推論を行っているわけではないが、完全に固定的な仕方で行われているわけでもない、ある程度の柔軟性をもった行為が存在しているように思われるのである。例えば、次のような例を考えよう。中のエサを取ると扉が落ちる仕掛けになっているケージがあって、その中のエサを狙う猫がいる。賢い猫はケージの中のエサを知覚してすぐに行動に移るのではなく、エサをとってから無事にそのケージから逃げおおせるかどうかを考えてから行動しているように思われるときがある。

ところが、デイヴィドソンの見解が正しいとするならば、このとき猫が知覚から形成して「思考」に用いたのは信念ではありえない。なぜなら猫は高階の信念を持っていないからである。にもかかわらず猫は、ある種の思考を行った結果、無意識的な行為よりも柔軟な仕方で行っているように思われる。このようなクラスの行為も無意識的な行動から区別される意識的な行動であり、その行動の基になった知覚的状态を現象的に意識的であったと考えることができるのではないだろうか。

このような行為を導く認知的状態を準信念的状态(subdoxastic states)と呼びたい。準信念的状态とは、信念と同じように外界についての内容を持つ認知的状態である。今の例においてはあそこにエサがある、閉じそうな門があるという内容を持つ状態である。また、これらの状態は単に外界についての内容を持つだけでなく、準信念的状态間の相互作用を通じて適切に行動を導くことができるような状態でもある。しかし、以上のような信念との類似点を備えていながら、信念そのものとは異なっている状態であり、またこれらは知覚的状态そのものとも異なる状態なのである。

このような準信念的状态を形成することができる知覚的状态を現象的に意識的な状態と考える立場を、現象的意識の準一階説と私は名付けたい。準一階説がもたらす重要な帰結として、動物や幼児も現象的意識を持ちうるということがある。現象的意識の高階説は、高階の信念を形成できない動物や幼児は現象的意識を持つことができないことになる、という反直観的な帰結を抱えていた。しかし、現象的意識の準一階説によれば、動物や幼児であっても準信念的状态は持つことができるならば、現象的意識を持つことができると考えられるのである。